研究エッセイ

瀬戸内海歴史民俗調査と中島ミカン

森　武麿（非文字資料研究センター　研究員）

私は2009年に神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科の教員となり、すぐさま日本常民文化研究所兼任となった。その年の9月には、同研究所の「瀬戸内海の歴史民俗調査」の第1回調査がスタートした。私は、ただちにこの愛媛県松山沖の二神島共同調査に参加することになった。正直、わけもわからないうちに共同調査に加えられたという感じであった。

もちろん、私は二神島を訪ねるのは初めてであり、離島の調査も初めてである。これまでは居住地の関係もあり、関東近県、東北地方の農村が、調査対象地であった。そのため「関西の調査をしてみたい」、「離島・漁村調査も面白そうだ」、「松山の道後温泉でも入ってくるか」、ぐらいの気分であった。また、私の生まれは、戦争直後、疎開先の岡山県笠岡市の沖合、瀬戸内海に浮かぶ神ノ島であった。二神島調査は、私の生まれ「故郷」の近くを知るという気分もあった。しかし、そのような物見遊山気分も、2009年から10年にかけて3回の調査に同行するなかで、次第に吹き飛んでいった。ここでは、その調査過程を述べてみたい。

調査の前に、網野善彦『古文書返却の旅』（中公新書、1999年）を読んでみた。第4章「海の領主－二神家と二神島」が今回の調査地を論じている。忽那諸島の二神島は、中世の「海の領主」として、河野水軍、村上水軍が暴れ回り、忽那氏が支配する拠点であり、近世まで九州と近畿を結ぶ瀬戸内海における海上交易の要衝であった。

網野が二神家の文書を借りたのが、1954年であり、高度成長が始まる時であった。その10年後の1965年にも二神島を訪ねているので、1995年の古文書返却は30年ぶりの二神島の旅であった。

「島の状況は30年前とは大きく変わっていた」「二神家の前の白砂青松の浜辺はまったく姿を消し」とある。たしかに、高度成長からバブル崩壊に至る30年の変化は著しいものであったろう。

さて私は、瀬戸内海共同調査に加わったのはいいのだが、何を調査していいか皆目検討がつかなかった。最初の調査であった2009年9月に、中村政則氏と二神島の村上水軍の末裔という村上宗一郎氏を訪ねて、島の近現代の歴史を聞き取りした。そこでわかったことは、近年まで島ではミカンの隆盛の時代が続いたということであった。

私は1980年代から、神奈川県小田原市の自治体史編纂にかかわっており、近現代の小田原のミカンの発展には関心をもってきた。小田原市では、戦後初の公選市長は魚問屋の一族であり、それが高度成長を経てミカンの隆盛とともに漁業の力が落ちると、市長はミカン農民に変わるのである。サカナからミカンへの変化を象徴する戦後史である。だが、網野氏の「旅」を見ても、村上氏が話すような二神島の近現代のミカンの話がまったく出てこない。中近世の海に関心があって、現代の山のミカンには関心がなかったのだろうか。

愛媛県はミカンの主産地であることは誰でも知っている。「愛は静かに」という言葉がある。「愛」は愛媛県、「は」は和歌山県、「静かに」は静岡県である。ミカンの三大産地であり、愛媛県は1970年から34年間全国一の出荷量を誇っていた。ついでに言えば、4位は伊豆から小田原にかけての神奈川ミカンである。「愛は静かに神だのみ」というのであろうか。ミカンの産地は、江戸時代の和歌山から海辺の村の日当たり良い傾斜地に広がっていったのである。ミカンと海は切っても切れない関係にある。

そこで、私はこの共同調査で、愛媛県忽那諸島のミカンを調べてみようと思い立った。

2010年9月6～8日の第3回調査で、二神島の隣、忽那諸島の中心である中島を訪ねた。中島は忽那諸島の中心に位置する島で、諸島のなかの最大の島、まさに真ん中の島ということである。この島が忽那諸島のミカンの発祥の地であり、中心地であった。「中島ミカン」発

写真１　島田茂一郎碑

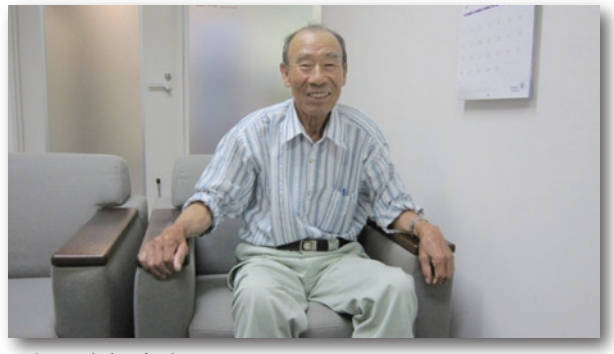

写真２　山本一郎氏

祥の地というのは、現在の JA えひめ中央農協中島支所の前にある島田茂一郎の碑に記録されている。明治 40 年ごろ、ミカンの「木出し時に誤って折損し切除した枝の観察からミカンの整枝剪定を生産技術として確立」したという。これによって、島田茂一郎は「ミカンの神様」といわれ、ここから中島ミカンの発展が始った。日露戦争後から温州ミカンとして、中島から忽那諸島に広がり、島ミカンが普及していくのである。中島ミカンが隆盛を極めるのは、戦後の高度成長による大衆消費社会の成立による。

網野が２回目に訪ねた 1965 年は、忽那諸島の各島の農協が合併して、中島農協が成立した時であり、ミカン作が絶頂期をむかえていた。この年中島、睦月島、野忽那島、怒和島、津和地島、二神島が一つの農協になり、ミカンの中島ブランドが成立したのである。二神島は 1948 年にミカンの出荷組合が出来て、1962 年には他の島に先駆けて中島農協に合併している。二神島と中島はとなり島であった。中島農協は 1968 年には中島青果農協と改組されて青果連に加入し、忽那諸島にミカン中心の産業構造が確立したのである。

そこで、私は、中島中央公民館の豊田渉氏の紹介で、中島で一番のミカン農家であった山本一郎氏を訪ねた。共同調査地の二神島からフェリーで中島に渡り、公民館と大浦にある山本氏の自宅で１日かけて話を聞いた。

山本氏は 1931 年４月生れの 79 歳である。話は大変面白かった。山本氏は、島一番のミカン農家になるが、もともとは農家の跡継ぎではなかったという。入り婿で山本家に入ったのである。父親は、中島小浜出身で、東京に出て無声映画の活動弁士をしていたという。徳川夢声と同期であったという。母は同じ中島出身であったが、一郎氏が生れた早々に、昭和の不況のため生活破綻で離婚し、一郎氏は中島に母親と一緒に戻ってきたという。ちょうど無声映画からトーキーに変わるころでもあった。弁士は失業したのだろう。島に戻った一郎氏は、敗戦時に中島の国民高等学校高等科２年の 14 歳であった。敗戦の４月８日に中島と二神島の水道を航行する戦艦大和を見たという。戦艦大和は、広島の呉軍港を出航して、片道特攻として沖縄戦に向かうところであった。忽那諸島と広島は近い。二神島の聞き取りでは、８月６日の広島の原爆を島から目撃したという話があったが、忽那諸島の人びとは、多くは松山に出稼ぎするより、広島に出たという。

一郎氏は戦後小学校高等科から新制中学に編入して 1946 年３月に卒業し、大工見習いとして広島県呉市の大内組に就職する。すぐさま原爆投下跡の広島に入る。都市壊滅から復興の広島は建築ブームであり、一郎氏は大工として、腕を磨き、４年目 19 歳で独立して棟梁となり、22 歳で３人の弟子（徒弟）を抱えるまでの、腕のいい大工になった。しかし、24 歳のときに、中島の山本家の婿養子となって島に戻る決心をしたという。山本家は田畑７反、山４町の上層の農家であったが跡継ぎの男の子がいないので、養子を迎えたのである。こうして、腕のいい大工棟梁は農家の主となった。跡を継いだのが 1953 年ごろであり、ちょうどミカンが隆盛に向かうときであった。網野善彦が最初に二神家を訪ねたのはこのころである。山本は、婿入りするやいなや積極果敢な経営を展開する。山を開墾してミカン畑にして、大成功をおさめるのである。1970 年には田畑もすべてミカン畑にして３町３反経営の大経営、農家の手伝い８、９人を雇い、ミカン収穫１万 2000 キロ、収入 1350 万円の中島第１位のミカン農家になったという。山本家の新築の家もこのころに建っている。この時代、島では代々の自給用の田をすべてミカン畑に変えた。中島の田はすべて無くなったという。わずかな自給を除き畑もほとんどミカンに代わり、農業は自給経済から、ミカン収入による貨幣経済に完全に切り替わったのである。

1970年は、高度成長の真っ只中、愛媛ミカン・中島ブランドの絶頂期であった。1970年代は温州ミカンに代わり伊予柑が爆発的にヒットした時代であった。1972年には、小柳ルミ子の「瀬戸の花嫁」が大ヒットしている。この時代、瀬戸内海は輝いており、「愛を信じて島から島へとお嫁に行く」娘たちがいた。嫁ぎ先は「段々畑にさよなら」してミカン農園をもった農家であったのだろうか。陽光に輝く瀬戸内の海は、バラ色の夢が実現する海でもあった。

山本一郎氏のオーラルヒストリーは、昭和不況から戦後高度成長に至るサクセス・ストーリーでもある。

さらに、一郎氏の話が終わったとき、2010年3月の第2回調査のときに聞き取りした武田満幸氏が加わった。武田氏は近所に住んでおり、わざわざ挨拶に来てくれたのである。武田氏は1930年生まれで80歳である。彼は中島青果農協から愛媛県青果連の専務理事となり愛媛ミカンの中心人物となった実力者である。中島町の町長もつとめている。中島から愛媛青果連の専務を出したことは、中島ミカンがまさに愛媛ミカンの中核に座ったことを意味していた。彼によって中島ブランドが確立したのである。

しかし、ここから一郎氏の息子、良幸氏が話を引き継ぐ。世代は変わる。彼は50代の壮年期で、いま山本家の当主である。良幸氏は語る。1968年のミカン不作を頂点として、ミカンは早くも下り坂となる。70年代は伊予柑が当たり、ミカンの隆盛は続くが、1980年代のオレンジ自由化、さらにバナナ、リンゴ、ナシなど多様な果物が広がり、ミカンの消費が半分に落ち込むなかで、ミカンは果物の王座を失っていく。ミカンの衰退とともに、ポンジュースなど加工品にも進出した。さらに、現在ではミカンにポンカンなどいろいろな柑橘類の交配をかけて、デコポン、清見、はるみ、不知火など多様な品種を生み出している。しかし、新品種は必ずしも土壌と合わず、ミカンの衰退を止めることはできないという。

ついに1997年、中島青果農協は、温泉郡の全農協と合併し、えひめ中央農協に吸収され、2002年には、ついにミカン箱から中島ブランドが消えた。1965年中島ブランドが成立してから40年足らずで中島ミカンは終焉を迎えたのである。戦後史の一サイクルが終わったのである。

現在、山本家では3町5反のミカン経営で年収250万円という。これではとても経費もつぐなえないので、今年はついに1町歩のミカン畑を廃園にしたという。3町5反で島一、二をあらそうミカン農家が、年収250万円とはあまりの衰退に声もなかった。これでは都市の失業者、ワーキングプアの所得水準と同じである。良幸氏の怒りは心頭に発する。ミカン経営が成り立たない現状と農政への怒りである。また中島ブランド復興にかける思いも強い。いまミカン経営農家は崩壊の危機にある。

私は話を聞いたあとに、山本ミカン園をクルマで案内してもらった。廃園がところどころに広がり、今は使われない山の傾斜地に敷かれたモノラックが錆びたまま放置されていた。ミカン作の崩壊を肌で感じた。

以上、二神島調査から、中島ミカンの聞き取りを通して、私の瀬戸内海共同調査の方向性が固まった。近現代の島々に広がったミカン作の盛衰を通して、島の人びとの暮らしの変貌を明らかにすることである。そのためには、①ミカンは忽那諸島、中島に入る前どこから来たのか。ミカンのルーツを知ること。②ミカンと海の関係、ミカンは海を通して関西市場とつながっている。ミカン船はどこへ行くのか。③ミカンは人びとの暮らしをどう変えたのか。忽那諸島の生業は島によって異なる。漁業、畑（タマネギ、生姜）、田の構造がミカンによってどう変化したのか。ミカンは島の工業、商業をどう変えたのか。ミカンの民俗（正月ミカンなど）は他の研究者から教えてもらうことにして、しばらく瀬戸内海のミカンの現代史にこだわってみたい。

私はこれらの島の人びとのオーラルヒストリーを通して、歴史は単なる過去を訪ねて、栄華の跡を懐かしむだけでなく、現状との厳しい緊張関係のなかで、現代ときり結ぶような研究ができなければならない、と痛感した。歴史は過去を美化することでない。歴史ロマン主義ではいけないのだ。地方産業の危機と地域崩壊の現場に立って、過去の歴史を訪ね人びとの話を聞くことが、それらの人びとに勇気をあたえるような研究に結びつくことを、心に刻みたい。

写真3　ミカン園から中島大浦をのぞむ